



ち え の わ
レオナルド

Vol. 25
ダ ヴィンチの階段

会員 若林 擴

フランスのロワール地方にあるシャンポール城には、レオナルド・ダ・ヴィンチが発明したといわれる、登りと下りの人が会わないようにしたアイデアの二重螺旋階段がある。

バチカンにも同じような二重螺旋階段があるそうだ。

寛文元年（1661年）隠元禪師が中国より隠元豆と一緒に禅宗を日本に齎した。中国様式で京都宇治に建設された、禅宗の大本山黄檗宗万福寺の末寺である本所五百羅漢寺は、後から日本に渡来した宗教なので寺を維持する檀家を持っていなかった。

徳川幕府は戸籍管理機能を持たせるために、昔からの各宗派の寺を維持する檀家制度を定め、一寺を一定数の檀家が支える組織を作った。身分証明書の発行や旅券の発行権を持つ事により、寺の権限が強くなり、生活が豊かになって無為徒食の僧侶が増え、宗教活動を忘れ、酒色に溺れた。

墮落した旧来の宗教をかねがね快く思わなかった、病的に潔癖家の徳川綱吉とその母桂昌院は、中国から渡来した檀家を持たずに清貧の中を庶民救済に身を捧げる禅宗の僧侶達に感動して、本所五百羅漢寺に最初一千五百坪の土地を寄進し、後に同じく質実剛健を好む將軍吉宗が三千坪を寄進し、徳川幕府が財政的に庇護した。その故か五百羅漢寺の宗紋は三つ葉葵である。

徳川家の庇護の基に享保十年（1725年）建立された大伽藍本堂大雄殿の構造は、広重の江戸名所図絵に残っているように、3世住職象先和尚の発明で、当時、五百三十体を越える木像に漆を塗り金箔を身に纏った等身大の羅漢像と釈迦如来を回廊式に拝観するのに、旅姿の庶民が土足で回れる土間の回廊と、着飾った富裕な町人や大名が足袋裸足で歩ける板敷きの回廊を、反り橋を使って立体交差させた二重回廊の構造を日本で初めて採用した。

数多くの仏像を拝観できる京都の三十三間堂は仏像を横一面に配列してあるだけで、芝増上寺の山門の上にある多数の羅漢像も横一連に安置されている。

広重の版画に残っている、隣接した3階建てのさざえ堂（さざえの殻に似ていることから訛って）は、スロープの回廊に並ぶ等身大の金箔を身に纏った百観音像を拝観しながら、3階に登り下りする人がぶつかることの無い、螺旋二重回廊スロープにした構造も日本で初めて採用された。

現存する同じ構造を有するさざえ堂は、会津若松の飯盛山にある白虎隊の墓近くに六角三層のさざえ堂があり、階段の無い螺旋状の坂を登って行くと、いつの間にか下りになっているという不思議な回廊は重要文化財に指定されている。

いずれも登りと下りの人が会わないようにしたアイデアの二重螺旋階段の構造と全く同じアイデアで、当時ヨーロッパと交流があったかもしれない興味深い記録である。

以上の記録は角川書店の角川夫人から頂いた高橋勉著、現在の目黒五百羅漢寺の齊藤見道住職監修「蘇える羅漢たち」の本に書かれている。

更にこの本の中に、私の祖父・若林芝玉の記述があった。

江戸名所図絵に載っている本所五百羅漢寺の移転先、目黒五百羅漢寺で角川家が法要を行なった際に、私の祖父若林芝玉が、昔、五百羅漢寺の住職であったらしいと前に話したことを角川夫人が覚えていて、現在の齊藤見道住職に、友人の祖父が同寺の住職であったらしいと話したら、即座に知っていると言われ、この「蘇える羅漢たち」の本の祖父に関する記述の箇所に付箋を付けて頂いた。

享保から本所にあった大伽藍五百羅漢寺は、安政二年十月二日夜四つ時（午後十時頃）に、震源が亀戸から亀有にかけての江戸直下型大地震により、一瞬のうちに崩壊し、その後何度も修復を試みたが、巨大さを誇っていた築地の西本願寺さえも倒壊させた度重なる暴風と河川の溢れる高波で、五百羅漢寺も再び壊滅的な損傷を受けた。

この享保年間、歌舞伎の演目「籠釣瓶花街酔醒」

で佐野次郎佐衛門が花魁「八つ橋」に愛想を尽かされ、村正の妖刀「籠釣瓶」で花魁「八つ橋」を始め吉原で百人斬りがあったとされる時代でもある。

幕末の動乱期を経て、幕府から明治新政府に移行し、1868年（慶応4年）3月13日、明治新政府は天皇中心主義の神道国有化により神話と神社を結びつけ、神仏判然（分離）令を發布した。

日本人の宗教観は古来神仏習合であり、神社と寺院は分ち難く混合していた。当時の日本人は仏教徒が多く、永年仏教界に抑圧されていた神社はこれを利用して廃佛棄釈を煽り、事もあろうに、奈良の興福寺の五重塔まで二百五十円（一説には二十五円）で売却され、買主が塔に使用されていた金具を目当てに火をつけて燃やそうとしたところ、付近の住民の反対に会い、思いとどまったという話さえもあった。

政府は何度も訓告を出して、神仏判然（分離）令は廃佛棄釈ではないと強調したが、時代の波により庶民の支持を失った寺は、暴風雨や地震で損壊した堂宇を改築することはおろか、寺そのものを維持し、法灯を守ることも容易ではなかった。特に徳川家の庇護を受けていた、芝の増上寺、上野の寛永寺を焼き払い、鎌倉の大仏を潰して売り払おうという話まで出た。

五百羅漢寺が本所区緑町にあった明治三十年頃、ネパールで梵語の仏教原典と、チベット訳の原典を入手する目的で、当時の仏教界に不満を持つ本所五百羅漢寺の二十七世住職河口慧海和尚は、日本人で初めて秘境チベットに潜入し、チベット語の仏教原典を入手して日本に齎した有名な冒険小説の主人公である。

明治三十年、京都宇治黄檗宗大本山五百羅漢寺は、僧籍簿に示すように、チベットに渡った二十七世住職河口慧海の後任として、私の祖父若林芝玉を本所五百羅漢寺の二十八世住職に任命した。

祖父若林芝玉は、明治三十三年（1900年）9月5日付けで東京府知事の募金許可書を得て、荒れ果てた寺の修復や再建の費用を募った募金活動を行い、本所から目黒の地に五百羅漢寺を移転して再建を果たした。当時の再建費用を募った稟告書は現在も目黒五百羅漢寺に残されている。

現在の目黒五百羅漢寺の羅漢堂及び本堂大雄殿内には、本所五百羅漢寺にあった五百三十体を超える羅漢さんの数に及ぶべくも無いが、今でも二百七十八体の等身大の羅漢さんに囲まれた釈迦尊像の前に宝塔が置かれ、歴代住職の名前の中に祖父二十八世住職若林芝玉の名前があり、本堂大雄殿外の歴代住持の石碑にも同じく祖父二十八世住職若林芝玉和尚の名前が刻まれている。

五百羅漢像の始まりは、元禄四年頃に最初十六人の蔵前の札差の隠居の、一人一体五両の喜捨で始まった。当時米一石が金一両の米の値段で割り出すと、現在の米の値段を十キログラムで約四千円として、一斗（十五キログラム）で六千円、一石で六万円、金一両は約六万円で、五両なら三十万円となるが、現在この金額での等身大の木彫、漆塗りで金箔を貼った羅漢像の制作は、到底、無理であろう。

羅漢像はこのように等身大の木彫に漆を塗って金箔を貼ったもので、後に赤穂藩の浅野匠頭、現在の三越の越後屋、鳥原の花魁夕霧が羅漢像を寄進した記録が、現在の目黒五百羅漢寺の資料館に残っている。

私が酒もタバコも女もやらず、美食するにも拘わらず、尿酸値が3.3、前立腺PSA値が10年間平均0.35、血圧は上が130の下が70でいられるのは、祖父が仏門の出であった功德からかもしれない。

目黒五百羅漢寺は目黒不動尊の隣で、是非一度行かれてみると良い。